

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

二つの大阪万博マレーシア館：1970年と2025年のパビリオン建築から

宇高雄志（兵庫県立大学環境人間学部教授）



2025年・大阪万博マレーシア館（筆者撮影）

2025 年・大阪万博のマレーシア館は隈研吾建築都市設計事務所が設計した。東京五輪会場の国立競技場の設計でおなじみの名門建築設計事務所だ。3 階建ての延べ床面積約 2,300 平方メートルの鉄骨造の建物。「調和の未来を紡ぐ」をマレーシア館のテーマとし、無数の竹が波打つように建物の表皮をまとう。

隈氏は、竹からマレーシアの森をイメージしたという。少し離れてマレーシア館を見上げると、スカイラインに溶け込むように竹の波打つ壁が立ち上がる。無数の竹がうねるさまは迫力がある。パビリオンへの入り口は竹と建物の隙間に据えられたらせん状の階段を上がってゆく。内装の一部にもマレーシアから持ち込まれた竹で内装が作られた。この特徴的な竹のレイヤーは鉄骨造の建物の表皮として設けられている。

中央には生命をイメージした楕円（だえん）の吹き抜けがあり、らせん階段が設けられている。展示は乃村工芸社によるもの。カルチャーホールには、ショップハウスやカンポン（田舎）の住宅、そしてナシレマ（ココナツミルクで炊き込んだご飯とおかず）などのマレーシア料理の精巧な模型が並べられていた。

マレーシア館で、ふと話ができた係の人は、マレーシア政府観光局の職員さんだった。クアラルンプール出身の彼女は、大阪の下町の宿に滞在しつつ通勤しているとのことだった。私が万博に行ったのは 5 月だった。彼女は、この先の大阪の暑い夏を心配していた。

「いのち輝く未来社会のデザイン」がテーマの大阪万博…果てしない行列、あふれる人工音声とデジタル画像、お疲れ気味の係員さんたち。こんな万博会場で

クアラルンプールからやってきた彼女と、まったりと世間話ができるパビリオンはマレーシアらしい。

ふと 1970 年の大阪万博のマレーシア館は、どんな建築だったのか気になった。

1970 年・大阪万博のマレーシア館はミナンカバウ様式だった。木造、一部 2 階建てで、設計はユー・ホンニエン氏によるものだった。陸屋根の上に、ミナンカバウの民家のような棟が反りあがった屋根がかけられていた。壁面の低い部分はガラスの連窓で、高い部分は縦目に板をはっている。黄色でマレーシアと大書きしている。当時の様子を大阪万博公園ウェブサイト<<https://www.expo70-park.jp/cause/expo/malaysia/>>で見ることができる。

当時のマレーシアでも、ミナンカバウの屋根をかけた公共建築が多く建てられた。マレー・ナショナリズムとの呼応によるものだろう。ペナン国際空港、高速道路のゲート、マレーシア工科大学（UTM）の門もそうだったか…。当時のマレーシアの建築界もマレー文化やイスラムのモチーフを建築空間に用いたのだ。1970 年・大阪万博のマレーシア館は、日本の建設会社が施工したとはいえ、20 人のマレーシア人の大工が腕を振るったそうだ。

それにしても 2025 年・大阪万博のマレーシア館は、なぜマレーシア人の手で設計し、施工しなかったのだろう。マレーシアでは、昔から文化的多様さを大切にしつつユニークな建築表現が開花してきた。今や、世界の建築界をうならせるマレーシア人建築家も多く輩出している。もっとも、建築は芸術性をまといつつ、同時に工期も工費も、時にはポリティクスも絡みつく世俗的な営みでもある。

世界のどこかで開催される次回の万博。マレーシア館は、どんな建物が建てられるのだろうか。

<筆者紹介>

1969 年、兵庫県生まれ。専門は建築学、文化遺産保全。ペナン州のマレーシア科学大学（USM）に研究員として 3 年滞在。建物と人の暮らしの関係を捉えている。主な著書に『多民族〈共住〉のダイナミズム：マレーシアの社会開発と生活空間』（昭和堂、2017 年）、『神戸モスク：建築と街と人』（東方出版、2018 年）などがある。